



2010

**ピッポ新聞**

12

No.254

子どもの本専門店 **ピッポ**

**ピッポ古書クラブ**

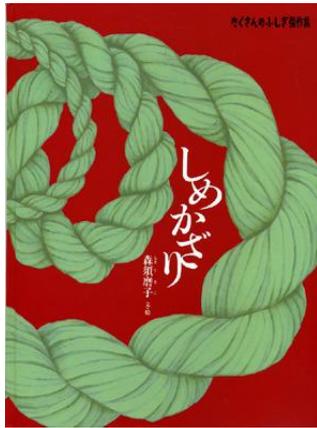
〒424-0886  
TEL & FAX

静岡市清水区草薙1-6-3  
054-345-5460

URL <http://www.pippo.co.jp>  
E-mail [itoh@pippo.co.jp](mailto:itoh@pippo.co.jp)

**冬休み特集**  
ねー、この本読んだ  
この秋出版の気になる本

いよいよ十二月、子どもたちにプレゼントをあげる機会が多い月です。「子どもには本をプレゼントしたいわ」と、思っている方もいらっしゃるでしょう。そんなとき本を選ぶ参考になればと、今月は最近出版されたなかで、おじさんが読んで気になった本を何冊か紹介したいと思います。



円 『しめかざり』 (森須磨子・文・絵 1365  
福音館書店)  
小学生だったころ、冬になると、ぼくの住んで

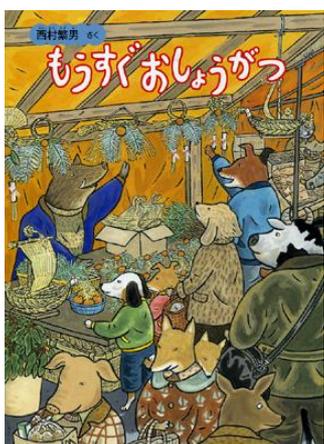
いた静岡市の駒形3丁目のあたりには、「納豆」売り、「お正月飾り」売りがやってきたものだった。「なつとなつ」という売り声をあげながら売りにくるのは

子どもだった。売り子の子どもは、アルバイトとしてやっていたものだろうか？不確かな記憶であるが、たしか納豆を1個売ると3円もらえるのだということだった。

「正月飾り」売りの方は、正月が近づくと「ウラジロいらんかねー」という声をあげながら、売りにくるのだが、こちら子どもが売り歩いていた。これは安倍川の向こう、丸子の方面から売りにきていたようだ。おとな(じいちゃんやばあちゃん?)が造った「正月飾り」を家の手伝いか、小遣い稼ぎなのかしらないが、2人が3人でリヤカーに積んだり、背負い籠に入れて売りにきた。ぼくはなぜかこの売り子をとてもやってみたかったのだが、その願いが叶うことはなかった。今でも「おかざり」が町に売られるころ、懐かしく思い出すのである。しかし、最近のようにスーパーなどで売っているのはあじけなくて興ざめだ。

この本は「しめかざり」がどんな風につくられるのか、また各地方にはさまざまな形と意味をもったしめ飾りがあることを紹介している。

『もつすぐおしょうがつ』 (西村繁男・さく  
840円 福音館書店)



「しめかざり」もそうだが、年末近くになると、お正月を迎えるための準備を、各家庭ではした

ものだ。この絵本の餅つき場面のように、ぼくにも同じような経験がある。近くの親戚が集まって、父の実家で毎年やった「もちつき」は楽しかった。核家族化、少子化が進行する現在では季節の行事がだんだんすたれていくようで残念でならない。

季節の伝統行事が失われていくことは、たんにその行事が生活から消えていくことでノスタルジックな面が失われるというばかりでなく、それを子どもたちが経験することで自然に育まれていた諸々(例えば大切な家族の絆など)が失われていくということでもあるのだ。いわば行事がはたしていた、伝えるべき日本人の知恵というべきものが、失われていくことになるように思う。

## ターシャ・テューダーの世界は

次に紹介するターシャ・テューダーの絵本によって、ぼくはより強くそのことを気付かされたのである。

たとえば、クリスマスツリーを、なぜ明かりで飾るのかということをご存知だろうか？よほど熱心なキリスト教信者でもなければ知る人は余り多くないだろう。ターシャの絵本はそれが厳かであり、宗教的意味合い(心の糧)であることを教えてくれる。

しかし、一方ではその意味すら知らず、また考えたことすらないこの国では(宗教や人間の心とは関係なく)、クリスマスが近づくと、年々派手になる各地のイルミ

ネーションに浮かれている。やれ何十万個のLEDの電球で飾られていてエゴにきづかっているなどと伝える。人びともこれを見に出かけ、「きれい」などという。ピカピカ光るのであるから、眼には刺激的ではあるかも知れないが、それを見て「きれい」などと感じる感性は狂っているとぼくは思うのである。さらに、エゴを強調するのであるならば、はじめからイルミネーションなど飾らないのが一番である。暗い、あるいは素朴なローソクの明かりこそがクリスマスにふさわしい。

『ターシャ・テューダーのクリスマス 喜びはつかむもの』(ターシャ・テューダー 内藤里永子・訳 1680円 メディアファクトリー)



この絵本は4つのパートで構成されている。最初はルカの福音書から、次にフアージョンやゴツデンなどのクリスマススの詩、さらにクリスマスにちなんだ伝説、最後はターシャの農場の、伝統を大切にしながらクリスマススの一部始終。ターシャは贈り物についてもこんなことを書いています。手作りの贈り物は、作る喜びと、贈るよろこびと、二重の喜び。「わが身を尽くしてこそ、ほんとうの贈り物」。わたしはこの言葉が好きです。

## 引き継がれていく思想

ターシャ・テューダーは、三十二万坪もの土地を長い間かけて魅力ある自然の庭園にしたことでも有名だが、その広い農場ではコーギ犬をはじめ多くの生き物を飼っていた。彼女の絵本の中にも、これらの動物たちがしばしば登場するが、今回の絵本のなかでも、彼女は飼っている動物や自然の鳥たちに、当たり前のこととして、クリスマスプレゼントを贈るのである。これは、彼女の「この地球上の生きとし生けるものは、みな同じである」という考えからきている。

この思想は、ナチュラリストであり画家で、動物作家のアーネスト・T・シートンの考え方であった。このことから、ターシャ・テューダーもシートンの考えに共鳴し、影響を受けていたことが分かるのである。

さらに、現在このシートンの考えを引き継いで活動しているのが、ナチュラリスト

で、動物学者の今泉吉晴氏である。

9月号のピツポ新聞に紹介した今泉吉晴氏の新訳の『シートン動物記』は、紹介時点では7冊出版されていたが、その後さらに『イノシシの勇者 フォーミー シートン動物記』と『カラスのシルバースポット シートン動物記』の2冊があらたに加わった。このシリーズは引き続き全十五冊出版されるそうだ。

『イノシシの勇者 フォーミー シートン動物記』（今泉吉晴・訳 図書館版1890円 ソフトカバー版1365円 童心社）



この本は、野性のイノシシの子であった主人公フォーミーが、人間の女の子に育てられ成長したが、自然に戻り、連れ合いを得て、家族をそだてていく物語である。その過程でフォーミーは、多くの体験によって知恵を付けていく。一番はクーガクマ（くるくま）との戦いである。フォーミーは幼いとき母と兄弟をこのクマに殺さるという因縁があり、再び家族を守るために戦つのである……。

さて、シートン動物記には、「地球上の生きとし生けるものはみな同じ」という考え方が作品の背景に一貫して流れているが、これは薄っぺらな動物愛護や、ヒューマニズムなどとは全然違うものである。この

『イノシシの勇者 フォーミー』もそうであるが、シートンが野生動物をどのような存在として、見ているかということに尽きるのである。

シートンは自身が多くの野生動物と接し、また、自然のことに精通している猟師などから聞いたことをもとに、動物たちは誇りを抱き、知恵を継承し、家族を守るための戦いもいとわれないものだと見る。

このシートンの視点を理解し、動物学者の目を加え、あらたなシートン像を提起してくれるのが今泉吉晴氏である。この冬『シートン動物記』（既刊8冊）の世界を楽しむのもおもしろい。

### 3人の日本人作家のファンタジー

さて、今泉さんは、シートンは動物を擬人化して人間の言葉を喋らせることはしていない。自身の多くの経験や目撃談を踏まえて、動物の立場（考え）にたつて物語を書いているのだという。だから、『シートン動物記』はまったくのフィクションではなくノンフィクションであるという。

これは事実から真実を伝える方法であるが、フィクションの世界を物語ることで真実に迫るのが、ファンタジーである。

児童文学にはファンタジー作品がおおくある。C・S・ルイスの「ナルニア国物語」やトルキンの「指輪物語」がその代表であるが、ここでは最近出版された、3人の日本人作家のファンタジーを紹介しよう。

『アギーの祈り』（濱野京子・作 平澤朋子・挿画 1470円 偕成社）

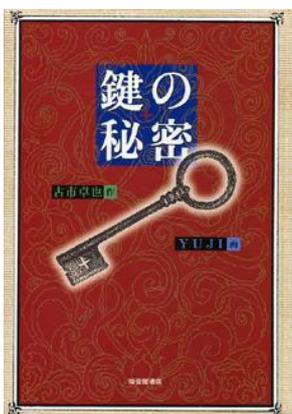


アギーは戦争難民の島で学堂の教師をやっている。ここにあらたに入ってきたラキ。彼女の踊りの才能に付き、密かに踊りの指導をはじめ

テル・ナキとよばれたたぐいまれな踊りの名手がいた。その踊りを愛した時の権力者が、これを兵士たちの戦争鼓舞に利用した。戦争は多大な犠牲を生み、戦争難民の島もその結果であった。あらたな権力者がラキとアギーの踊りに目を付けた……。

この物語には様々な個性をもつた人物が登場し、彼らがその役所で、いかにその個性を発揮することで物語を豊かにしている。ハラハラドキドキする物語の展開のなかにも、戦争のもつ罪の一面を明らかにしてくれる。

『鍵の秘密』（古市拓也・作 YUJI・画 2940円 福音館書店）

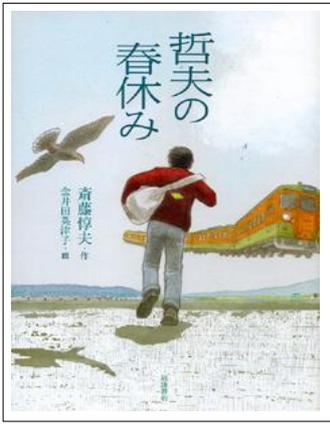


さて、この物語は「ナルニア国物語」のように、こちらの世界と、別の世界を

行き来することで展開してゆく。物語の鍵(？)を握るのが「鍵」である。「ドラエモン」のどこでもドア」ではないが、閉じられていないドアさえあれば、鍵を開けることができ、その王国のどこかの場所へ出ることがができる。別の世界からきたヴィットから、王国を救うため主人公昇は鍵を託されるのである。「蒸発」してしまった父を捜すためにも昇は王国の救済にのりだすのだ。た・・・。

690ページという長編物語である。それなり引き込まれてゆくが、長編ゆえか、焦点がすこしばんやりしているような印象をうけた。

『哲夫の春休み』(斉藤惇夫・作 金井田英津子・画 2625円 岩波書店)



この物語は、先に紹介した2冊のファンタジーのようにしながら物語しながら物語を読みすすめていくというわけにはいかなかった。もっとも、『鍵の

秘密』の方は、『アギーの祈り』ほどには、ワクワク感は無かったが・・・。

ワクワク感が得られないのは、その内容や、手法にもよるのだと思う。もちろん、

ぼくはワクワク感が無い物語をだめだというつもりは更々ない。ただ、迂闊にもいっつか、この作者の前3作の「ガンバーの物語」が、ワクワクドキドキ溢れるものだっただけに26年振りだというファンタジーに期待感が大きすぎて肩すかしを食った思いがあったのかもしれない。

読み進めていく内に、なんだか予定調和の作品だと思えてしまった。

しかし、本の帯の「ひとは、幸せになるために生きているのだろうか」というキーワードを視点に据えると、作者の思いというものが見えてくる。再読をする必要がありそう。

物語は中学入学を前にして、主人公哲夫が、父の故郷新潟県の長岡に列車で一人旅をする。その汽車のなかで哲夫は不思議な出来事とであい、そこで知り合ったおばさんやその娘みどりとともに不思議なできごとを媒介に話は進む。物語の進行とともにおのおのが抱えている問題も明らかになってゆく・・・。

ところで、この作品の作者の後記が気になった。作品が生まれた所以は理解できたが、この作者は具体的にいろいろな人の名前を掲げて感謝の意を表しているが、これはいわば作者の個人的なことであり、これだけ多くの名をあげて紙上で感謝することなど読者には不要である。

古い本買います！

(江戸・明治・大正・昭和の本)

暮れの大掃除で出た古い本や雑誌

買い取ります。本がたくさんの場合や、手が無い方はお宅まで出張いたします。

## 編集後記

先日TBS系列の全国ニュースが、奈良の「遷都1300年祭」の終了を告げていた。期間中の人出は二百三十万人で大成功だったと伝えた。その数分後、ローカルニュースにかわり、今度はこの日が最終日の「静岡大道芸大会」の人出が期間4日間で百六十二万人であったと報じた。もし数分前に「遷都祭」の人出のことを聞かなかったら、「へー、大道芸ってのはすごい人気だな」と感心して終わっていたら。あいにく奈良の人出を聞いた後では、162万人の人出の報は、ウソだと気付いてしまったのである。だって、奈良の方は期間が半年以上で二百三十万、こちらはたったの4日間で百六十二万、しかもどっひいき目に見ても文化度や質を考えたら「遷都祭」は全国区だけど、「大道芸」は地方区だろう。1日四十万以上の人出が静岡の中心部に押し掛けたということだ。冷静に考えれば、そんなキャパシティなど静岡の中心部にはないことは、一目瞭然だ。後日静岡市の広報紙にも百六十二万人の人出と書かれていた。十六億円の大赤字をだした静岡空港の利用予測も、こしてメディアと官庁が組んできたのですね！